第 13 回祥明大學校熊本県立大学学術フォーラム　報告

—— 新しい時代の新しいつながり方 ——

主催：熊本県立大学文学部
日時：2023年11月25日（土）13：00～16：00
場所：熊本県立大学中ホール

フォーラム開催を終えて
英語英米文学科　学科長　吉井誠

2023 年 11 月 25 日（土）、「新しい時代の新しいつながり方」というテーマでフォーラムを開催した。コロナ禍の空白の時期を経て、2019 年以来、4 年ぶりの対面式でのフォーラムとなった。祥明大學校から金教授、韓教授をお迎えし、県立大学からは、難波准教授、米谷教授、そして吉井、計 5 名の先生方の発表がなされた。金教授は韓国の日本研究関連学会における研究者のつながりについて、問題意識の共有という点から発表された。難波教授はロックダウンを通して人文系ネットワーク、研究者間のつながりがどう構築されてきたかについて話された。短い休憩をはさみ、韓先生は、韓国、日本を含め、アジアの文化をつないできた漢字について、韓国の日本語学習者の意識について発表された。米谷教授は江戸時代における地方武士のことばの観察を通して、当時の武士たちが方言の壁をどのように乗り越えてお互いにつながっていこうとしたのかについて話された。最後に吉井が語彙学習研究の動向を踏まえ、新しい時代の研究へとつないでいく事の大切さについて発表した。質疑応答では、参加者からの質問に答えながら、今回のテーマについて意見交換を行った。それぞれの発表内容については要旨を参照されたい。このフォーラムを通して、祥明大學と熊本県立大学が新しい時代を迎えながら、お互いのつながりを確認し継続していく決意をする機会となった。

文学部　学部長あいさつ　村尾治彦

ここまで長くもあり、短くも感じられた月日であったが、実感としては、ようやくこの日を迎えることができたという思いである。2019 年に本学での対面開催後、コロナ禍はそれぞれの大学でコロナの対応に追われ、オンラインでの開催すらままならなかった。この間、メールでのやりとりで開催に向けての調整をしてきたが、実現することなく、２００８年に第一回を韓国で開催してから長く続いてきた学術フォーラムも潰えてしまうのではないかと思われた。しかし、昨年 12 月に、Zoom でのオンライン研究交流会を実施することができ、久しぶりに両大学の教員が顔を会わせることとなった。実際に顔を見ての意見交換はメールでの文章のやり取りに比べると格段にお互いの思いが通じやすく感じられる。その時、今年、熊本県立大学で是非対面でフォーラムを実施しようと約束し、今回実現された。つながりを感じられた瞬間であった。

熊本県立大学国際教育交流センター長あいさつ　Richard Lavin

Among all PUK's academic relationships with overseas schools, our partnership with Sangmyung University has the longest history, and therefore has a special place in the hearts of many teachers and staff at PUK. When we visit Sangmyung University, or when Sangmyung University professors visit us, we feel a special warmth. Even at the height of the pandemic, PUK sent exchange students to Sangmyung University, where they were warmly welcomed. When shorter exchange visits were not possible, in place of physical visits we held online exchange events. When interacting with Sangmyung students, I am always impressed by the language abilities of the students studying Japanese; after just a year or two of study, they seem to be as fluent as I am after more than 30 years!

I very much hope that our relationship with Sangmyung University will continue for many more years, not only the forum but exchange and other programs, and I would like to thank Professors Han and Kim for their presentations and the pleasure of their company on this occasion.

プログラム

総合司会：村尾 治彦 教授 （熊本県立大学）

コメンテーター：Richard Lavin 教授（熊本県立大学）

開会挨拶　　熊本県立大学文学部長 村尾治彦

発表 Part I

講演１　韓国の日本研究関連学会における韓日両国の研究者の問題意識の共有
——2000年代以降の日本文学・日本学分野を中心に——
金（キム） 裕千（ユチョン） 教授（祥明大學校）

講演2　ロックダウンと人文系ネットワークの構築
難波 美和子 准教授（熊本県立大学）

休 憩

発表 Part II

講演３　韓国人日本語学習者の漢字学習の実態と実力調査
——旧JLPT１,２級水準の学習者を対象に——
韓（ハン） 先熙（ソンヒ） 教授（祥明大學校）

講演４　地方武士のことば観察　　米谷 隆史 教授（熊本県立大学）

講演５　新しいつながり方を求めて ～注の研究からの一考察～
吉井 誠 教授（熊本県立大学）

休 憩

質疑応答

閉会挨拶 熊本県立大学国際教育交流センター長 Richard Lavin

韓国の日本研究関連学会における韓日両国の研究者の問題意識の共有
——2000年代以降の日本文学・日本学分野を中心に——

金 裕千

本発表では韓国と日本両国の日本研究者の「つながり」に注目し、特に2000年代以降韓国の日本研究関連学会において両国の研究者の間でどのような問題意識が共有されてきたのかを、日本文学・日本学(日本の政治・経済・社会・文化・歴史・思想・宗教・民俗等)の分野を中心に考えてみたい。方法としては、主要学会の学術大会で開かれたシンポジウムのテーマとそれに関わる韓日両国の研究者の発表(基調講演・招請講演など)を検討する。

韓国における日本研究は、1980年代以前までは韓日両国の歴史的な背景によって日本語や日本文学を除いてはあまりなされなかった。1980年代以降は日本の経済成長に伴う韓国国内での日本需要増加など、実務的な関心から日本をめぐる多様な議論が次第に活発に行われるようになる。1990年代には日本で留学した研究者たちが韓国の学界に多数流入して日本研究が飛躍的に成長し、さらに2000年代の日本研究は多様化、専門化した領域に発展している(陳昌洙「韓国における日本研究ー多様化と専門化のジレンマー」『立命館国際地域研究』36号、2012参照)。韓国の日本研究関連の学会は、1973年に韓国日本学会、1978年に韓国日語日文学会が創立され、1970年代と1980年代の日本研究活動の中心となった。1990年代には韓国の各地域を基盤とする全国規模の学会や専門領域の研究学会が続々と創立される。全国規模の学会は、通常一年に4回学会誌を発行し、2回学術大会を開催しており、日本研究は量的にも飛躍的な発展を見せている(李京珪「日本研究関連学会の現況と課題」、『日本学報』91輯、2012参照)。

2000年代以降開かれた関連学会のシンポジウムのテーマは、「韓日間における文化交流と境界」(2005)、「日韓知的交流と日本学研究」(2007)、「危機状況と現代日本のナショナリズム」(2012)、「第四次産業革命時代と文化融複合ー新しい日本研究への模索ー」(2018)、「地域と大学の共生を図る日本研究の可能性」(2022)、「人新世時代におけるポストヒューマニズムと新しい日本研究の可能性」(2022)など、時に応じて浮上する韓日の両国関係や各国の社会的・歴史的な状況、あるいはより広く現代社会が直面する文明的・社会的・思想的な問題などと密接に関わっている。そして、常にそれらの問題との関わりの中で新たな日本研究の方向や方法論への模索が多彩にかつ持続的に行われている。また、両国の研究者の深い連帯感のもと、両国の文化交流と学術交流の発展のための不断の努力が傾けられている点を改めて確認することができる。

ロックダウンと人文系ネットワークの構築

難波 美和子

ロックダウンによって、人の移動が大きく制限される前も、人文学領域でのデジタル化は進行していた。文献資料、歴史的資料をデジタル化し、インターネット上に公開することで利便性を増し、分析を効率化する流れは2020年初めの時点で十分に形成されていた。プロジェクト・グーテンベルクに代表されるような民間によるテクスト公開、各国の中央図書館のアーカイブ作業はどこからでも高品質の資料にアクセスできる体制をもたらしている。

一方、人的交流面では、メールやSNSの利用が日常化して、連絡は用意になったとはいえ、利便性が上がりつつあったテレビ会議アプリの広がりは実感としてさほど目立ったものではなかったのではないだろうか。私自身が参加している学術組織でSkypeを利用している研究会はあったが、交流は直接に場を共にするものであり、事務的会議を除いては、例外的扱いだった。研究会や講演会にインターネットを利用することには多くの研究者が反対しないまでも推進するほどではなかった。

しかし、ロックダウンは会議のリモート化のみならず、学会や研究交流を様々なレベルでインターネット利用へと一気に拡張した。実際に技術的な面では準備ができており、何らかのきっかけがあれば人文学の諸領域でのリモート化が進んだと考えられ、それがロックダウンだったということではないだろうか。

移動や面会が制限されると、ふだんはインターネットの傍若無人さに眉を顰める向きも、メールやSNSを通して相互に繋がり、共感を表明した。予定されていた国際学会や研究交流が中止になる中、研究の継続に対処し、連絡を交換した。対処は様々な形をとって、短期間に新しい交流のプラットフォームを築き上げていった。ここでは、人文学領域のネットワーク構築の例を紹介する。(1) 創作者たちがロックダウンに直面して起こした行動として、世界各地の作家たちが参加した『デカメロン・プロジェクト　パンデミックから生まれた29の物語』(河出書房新社、2021)。文学愛好者たちの行動として、(2) 2020年7月にニュージーランドで行われた世界SF大会と (3) インドのジャイプル文学祭のリモート配信。研究者たちを中心としたコミュニティ活動として (4) (世界) ジェーン・オースティン協会のライブ研究会、(5) ロンドン大学の「長い18世紀イギリス史学会」のリモート化、最後に (6) 日本の社会人教育団体「KUNILABO」の講座リモート化。これらは一方的な情報発信ではなく、双方向の参加が可能なものであり、現在も継続している。

韓国人日本語学習者の漢字学習の実態と実力調査
——旧 JLPT 1，2 級水準の学習者を対象に——

韓 先熙

韓国は世界有数の日本語学習者数を誇るが、途中で日本語学習を放棄してしまう韓国人日本語学習者も見受けられ、その理由の一つに漢字の難しさが挙げられるだろう。学習者の日本語学習経歴がまちまちであり、日本語漢字の実力も個人差があることから、現場の指導は一筋縄で行かない事が多く、指導者は四苦八苦しているのが実状だ。

そこで本稿では旧 JLPT1,2 級水準の能力を有する韓国人日本語学習者 120 名を対象として、漢字学習の実態を知るためのアンケート調査を行った。また、学習者がどの程度、漢字語の意味を把握できるか調べるため、韓日共通の初等学生基本語彙 542 語のうち、日本の小学 4〜6 年生で学習する漢字で構成された 2 字熟語 71 語を用いて、これらの意味をハングルで書いてもらう調査を行った。その結果は次の通りである。

1）学習者は大学入学以前に韓国語漢字の学習経験を有する者が多いものの、日常生活では韓国語漢字を使わないという回答が多く、漢字学習が実生活に結び付いているとは言い難い。2）学習者は日本文化・日本語に関心があって日本語を学習している。特に 1 級水準の学習者は日本語学習を面白いと感じている者が多く、高い学習意欲を有している。この高い学習意欲が漢字学習の支えになっていることが窺える。3）学習者の 85.84%が漢字学習を難しいと回答し、「たくさん覚えなければならない」「読み方が多い」といった漢字学習の暗記の側面を負担に感じている。また、「形態が複雑」「書くのが難しい」といった回答は少なく、学習者が漢字の形態や書くことに注意を向けていない姿が窺える。

4）大学での指導は「意味と読み方の学習」に重点が置かれており、書くことに関しては学習者個人に任されている。学習者側は書くことで漢字を覚えられると認識している傾向があり、筆順や部首の学習は重視せず、筆順・部首を漢字を覚えることに活用しようとしていない。5）学習者は指導者に対して「意味や読み方の学習」「例文で学習」「面白い教材で学習」といった指導法を望んでおり、膨大な暗記事項を何とか克服できる方法を指導してほしいと望んでいる。6）漢字語の意味把握能力に関しては、初等学生基本語彙 71 語のうち 1 級水準の学習者は平均 52 語、2 級水準の学習者は平均 32 語程度、意味の把握ができた。ただし、これは個人差が大きい。また、旧 JLPT における出題基準での難易度が高く、かつ総画数が多い単語ほど意味の把握ができない傾向がある。調査対象者の大部分が漢字学習は難しいと答えつつも、日本語の勉強は面白いと答えており、高い学習意欲が漢字学習を支えている姿が浮かび上がった。

地方武士のことば観察

米谷 隆史

方言を記述する文献が多数著されるようになる江戸時代中頃にスポットを当て、この時代らしいつながり方に立脚したことばの観察や分析の一例を示すことにする。

全国方言辞典の嚆矢といえる越谷吾山『物類称呼』（1775年刊）は、江戸在住の俳諧師であった吾山が、各地方在住の俳人仲間を訪ねたり江戸を訪れた俳人仲間と談話したりする中で、雅だけでなく俗の側のことばの豊かさに目を開かれていったことが編纂のきっかけとされる。ことばを生業とする俳諧師にとってはまさに職業病の副産物とでもいえようが、必ずしも文芸の世界に遊ぶことのない地方武士にあっても、国元を一歩出ると、ことばの観察力が問われる場面が少なくなかった。なかんずく江戸では、市中での各種の付き合いもさることながら、江戸城内での勤務や諸藩との折衝の折に交わされることばに折々頭を悩ませたようだ。

東北の仙台（宮城県）や鶴岡（山形県）、米沢（山形県）では江戸語対応マニュアルのようなものが作成されているが、中でも米沢上杉家家臣で、江戸の留守居役を勤めた舟橋源太左衛門による『増補旅使奏訓』（1770年頃成立）は、上杉定勝（謙信の系譜上の孫）が残したという「使番（巡回や伝令の担当者）はことばのあやまり無きように」との戒めに報いるべく著されたなかなかの労作である。他藩の仕事仲間から「上杉の家臣が来ると言葉がわからないので受付役の連中が出たがらない」と面罵されたり、肥後細川家の留守居役の口上にじっと耳を澄ましたりといったエピソードが、藩の体面を一身に背負っているかのような書きぶりで記される。おそらくいくつかはネタなのであろうとは感じつつも、もう少し肩の力を抜いたほうが、などとツイ現代風の助言を掛けてしまいたくなるのだ。

ことばの観察という点では、肥後熊本藩6代藩主の細川重賢による『雑事紛冗解』（1785年以降成立）も見逃すことができない。こちらはイロハ分類の辞典形式で編成されており、例えば、「一里塚の事　一里山、肥後熊本、遠州辺、長州辺にて。一里木　熊本にて」のような記事は、藩主のきままな覚書のようにも見えるが、全体をじっくり眺めてみると、情報収集の背後にはやはり公務の影が見え隠れする。

上下関係のある社会においては、上下の間だけではなく、同輩同士の間でも自他の相違に敏感になるのは致しかたのないところ。古い時代の古いつながりだからと言って、「現代ではありえない」と果たして言えるのかどうか。

新しいつながり方を求めて～注の研究からの一考察～

吉井　誠

内容を理解しながら読む過程で語彙の知識を増やすことは可能である。それを補助する役割を注は持っている。デジタル時代の注は、クリック一つで画面の余白や単語の近くに出現する。どのような注がより効果的なのか、様々な研究が行われてきた。この発表では注の研究を振り返り、新しいツールが与えられた時に、どのように研究が進んでいくのかを概観する。

外国語学習における注の効果の研究は1980年 頃から始まったが、1990年前後からデジタル教材の開発に伴い盛んに行われるようになった。1990年代の後半からは、言葉による説明に加えて、デジタルならではの要素、絵・イラスト・動画・音声などマルチメディアを取り入れた注の研究が行われた。2000年代は、マルチメディアのどのような組み合わせが最も効果的なのかについて研究が盛んに行われた。2010 年代における全体の研究数は、1990年代から比べると5倍近くの増加となった。

この30年間を振り返ると、トピックによって異なる着目度の変化が見られた。マルチメディアに関する研究では2000年代に飛躍的な伸びを見せたが、2010年代後は落ち着きを見せている。それに比べ、注の言語に着目した研究は最初の20年、それほど変化はなかったものの、2010年以降に飛躍的な伸びを示した。研究結果にも多様性が見られた。注の言語として母語が効果があると見られてきたが、2010年代の結果を見ると、どちらとも言えないという結果が多くなっている。マルチメディアの組み合わせに関する研究においても、2000 年代は文字と絵などの組み合わせの効果が圧倒的に支持されてきたが、2010 年代に入ると文字のみの効果を支持するものや、どちらとも言えないという結果が出る研究例が増えている。

新しい研究テーマやツールが紹介されると注目を浴び、研究が盛んに行われる。目の前の現象、研究の動向に着目すると同時に、それまでの歩みを含め研究を俯瞰的に見ながら、底流する動きや変化に注視することが大切である。新しい時代の新しいつながり方を考える際にも、このフォーラムの各発表で提示された現象や研究成果を踏まえつつ、今の時代をどのように捉え、次の時代へどのようにつなげていくかを共に考察していきたい。